

# むつごろう通信

14号

2008年

9月30日発行

寄稿

## 海と関わり、いろいろな恩恵を受けて

上天草市議会議員  
天草不知火海区漁業調整委員会委員  
佐藤 ユミ子



海は幼いころの遊び場だった。汐が引いたら、友達と貝掘りやカキ打ち、ニシ捕り、シャク釣りなどをして遊んだ。

ある日、ニシ捕りで浜辺を歩いていると、沖を小舟が通った。すると、小さいイワシが浜辺にうちあがりぴちぴちと跳ねる。急いで拾い、家に持ち帰り喜ばれた。また、梅雨の頃、汐が引いた藻の中に甲貝がいた。小石や藻に産卵している。「海ほうずき」である。それを採り、学校に持って行き友達に自慢した。ほうずきに穴をあけて中の卵を出し、口に含みキューキューと鳴らす。幼い頃のなつかしい思い出である。

そんな豊かな海がいつ頃か変化して行った。カキやアサリなどが捕れなくなった。それは、家庭に台所洗剤が普及しだした頃と思う。海の汚染の原因はいろいろあると思うが、生活排水も大きな要因だと思う。現在、下水道整備や合併浄化槽の普及で川が浄化されてきた。それに伴って海も少しはきれいになり、カキも岩につき始めたと思ったら、今度はエイが岩にへばりついて真っ白になるように食べてしまう。



白いところはエイが食べた後

現在私は、漁業調整委員会に出席しているが、委員会では将来を見据えた魚介類の資源回復のため、いろいろな取り組みがされている。浮きガザミや真鯛（15センチ以下）の採捕禁止の委員会指示発動などである。資源を守るため、漁業者だけでなく遊漁者や漁をする一人ひとりが、これらのことを厳守しなければならないことだと思う。

昔はいなかったエイの異常発生など、温暖化の影響なのだろうか。海水温の上昇や赤潮発生、これらがもたらす影響が海の生き物に大きな被害をもたらす。



美しい天草松島の海を守りたい

日本は海に囲まれ、食を海に依存している。私たちは海と共生していくため、身近にできることから海の再生に役立つ行動を起こす必要があると思う。昔のような海に再生することは無理かも知れないが、せめてこれ以上汚染されない美しい海を次世代の子どもに残す義務があるのではないだろうか。

## 「モニタリングサイト1000」 調査を開始しました



調査風景

上天草市松島町永浦島の永浦干潟が、「モニタリングサイト1000」に選ばれました。

「モニタリングサイト1000」は、自然環境の質的・量的劣化の早期発見を目的に、全国で約1000の観察地点(モニタリングサイト)で、100年間継続して環境を調査する環境省の新プロジェクトです。観察地点には日本列島の様々な生態系(森林, 里地, 里山, 河川, 干潟, サング礁など)を代表する優れた自然環境が選ばれています。

永浦干潟が選ばれた主な理由は、自然環境が良好で、生物多様性が高く、熊



ヒメヤマトオサガニのダンス

本大学による過去のデータの蓄積があり、今後開発される可能性が低いことです。合津マリンステーションのメンバーによる第1回調査(7月1~2日)では、この干潟の代表種のハクセンシオマネキ以外に、希少種のイボウミニナ, オカミミガイ, キヌカツギハマシノミガイ, シオヤガイ, ツバサゴカイ, ウモレベンケイガニ, メナシピンノ, ヒメヤマトオサガニも確認されました。



ツバサゴカイ

## 第10回国際カイアシ類会議

(10th International Conference on Copepoda) 報告



嶋永准教授は、タイのパタヤで開催された第10回国際カイアシ類会議(2008年7月13日~19日)で、研究発表しました。

小型甲殻類の仲間であるカイアシ類は、最も生物量が多い海洋の動物プランクトンの一つで、プランクトン総個体数の70~80%を占めます。ほとんどの海産魚類の子供はカイアシ類を主要なエサとしているので、私たちも間接的にこの生き物のお世話になっています。

大会には、約40の国・地域から200名以上の研究者が集い、日本からも22名が参加しました。この数は韓国と共に主催国のタイ(26名)に次いで多く、我が国の海洋生物研究者の関心の高さを示しています。

私は、「ハクセンシオマネキとコメツキガニの巣穴が堆積物中の小型生物(メイオフアウナ)に与える助長効果」に関する研究発表をしました。「これら二種のカニの巣穴は、底生カイアシ類をはじめとするメイオフアウナには、あまり強い正の効果を与えない」という、ネガティブデータの発表だったため、聴衆の反応が心配だったのですが、予想外に好評でした。これはおそらく、私の研究テーマに対して興味を覚えたからだけではなく、他の発表者が大量の情報を早口でしゃべるため、多くの聴衆、特に非英語圏からの参加者がついていけない場合が少なからずあっ

## ハマグリ資源管理に関する研究と実績

熊本県は、ハマグリ生産量日本一です。とくに緑川・白川河口の個体は殻の模様が美しく、京阪神などに高値で出荷されています。しかし、このことは地元でもあまり知られていません。また、漁獲に関する規制がほとんどなく、多くの漁場でハマグリが乱獲されています。さらに、ブランド化や地産地消など、ハマグリを高く売る努力もほとんど行われていません。

逸見教授が長年東アジアにおけるハマグリ類の分類や生息状況に関する研究を行っていました。3年前から、「熊本県ハマグリ資源管理研究プロジェクト」(代表:内野センター長)を立ち上げ、ハマグリ資源管理とブランド化に関する研究を行っています。

プロジェクトでは、厳密な漁獲管理が行われている加布里湾(福岡県前原市)と管理のほとんど行われていない白川河口(熊本市)で、ハマグリ生息状況と稚貝加入・成長・生残などの生活史、漁獲の影響などを比較しました。その結果、白川河口では大型個体は少ないものの稚貝は豊富に生息すること、殻長で年1~1.5cm程度成長すること、死亡は年間を通して少ないことなどがわかりました。このことは、小型のハマグリ漁獲を規制すれば、大型の個体が増えることを意味します。そこで、研究成果や提言内容を説明する講演会を熊本県や熊本市と共に開催し、採貝サイズ規制を現行の殻長30mmから順次40mmに引き上げること、産卵期である夏場は休漁とすることなどを提言しました。その効果もあり、川口漁協や小島漁協などハマグリ資源管理を行う漁協が増えました。今後、漁獲管理地域でのモニタリング、漁業者・漁協間の合意形成、ブランド化の推進についても研究を進めたいと考えています。

たのに対し、私は、(自分が英語を早口でしゃべれないから、でもあるのですが)情報量を絞ってゆっくりと話したため、発表内容が明確に相手に伝わったためでもあると思われまます。「アナタの講演は素晴らしかった」と言われて、大変うれしく感じました。次の大会では、講演内容そのもので聴衆に絶賛されるよう、さらに研究を続けていきたいと思います。

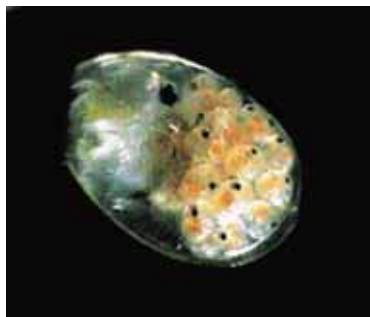
(有明海・八代海の生物一7)

## ウミホタル

ウミホタル(*Vargula hilgendorffii*)は、「蛍」という名前がついていますが、昆虫ではありません。左右二片の無色透明な背甲に包まれた体長約3mmの甲殻類(エビやカニの仲間)です。青い発光液を放出して光るため、海岸では大変目立つ動物です。しかし、完全な夜行性で、ヤコウチュウと間違われることが多いため、あまり知られていません。合津マリンステーションでは、10年ほど前から生態学的研究を続けています。

彼らの繁殖期は3~10月で、メスは背甲内に約50個の卵を産みます。1ヶ月足らずで孵化しますが、子ども(体長約1mm)は親と同じ形です。寿命は、数ヶ月です。寄生性甲殻類のウミホタルガクレが卵を食べることが、繁殖できない主な原因です。捕食者を驚かせて逃げるために発光すると考えられますが、求愛の際にも光るようです。

海岸で光るウミホタルは、まるで夜空で輝く星のようです。上天草市松島町の樋合海岸では、毎年夏休みにセンターと上天草市共催の海蛍観察会が開催されています。一度参加して見ませんか!



抱卵中のウミホタル

# お知らせ

## 1. 市民公開講座「有明海・八代海を科学する」の開催

研究成果の地域への還元および干潟浅海域に関する環境教育の充実を目的として、一般市民を対象とし公開講座を開催いたします。

日時：下記の期日の18時30分～20時00分

場所：熊本県民交流館パレア  
熊本市手取本町8番9号  
テトリア熊本ビル9階

参加費：無料

### 講義

第1回10月1日(水):開催にあたって 内野明徳  
(熊本大学 沿岸域環境科学教育研究センター長)  
「有明・八代海の現状とより良い環境創りに向けて」

滝川 清(熊本大学 同センター教授)

第2回10月8日(水):

「熊本県のノリ養殖について」

松尾竜生(熊本県水産研究センター

浅海干潟研究部研究主任)

第3回10月15日(水):

「干潟生物の巣穴が果たす役割」

嶋永元裕(熊本大学 同センター准教授)

第4回10月22日(水):

「貝類を通して見た熊本県の沿岸環境」

逸見泰久(熊本大学 同センター教授)

第5回10月29日(水):

「養殖ノリ糸状体の環境ストレス応答」

瀧尾 進(熊本大学 同センター教授)

第6回11月5日(水):

「堆積物に記録された熊本沖有明海の環境変化」

秋元和實(熊本大学 同センター准教授)

### 実習

10月23日(木):バスと実習船による見学と調査実習

(場所:熊本県水産研究センターおよび

熊本大学合津マリンステーション)

上記講義を受講されない方でも受け付けます。

### 申し込み方法

参加申込は終了していますが、空きがある場合には随時受け付けます。

参加を希望される方は電話、ファックス、電子メールのいずれかにて下記にお問い合わせ下さい。

なお、ファックス、電子メールの場合、〒住所、氏名、年齢、電話番号をご記入下さい。

〒860-8555 熊本市黒髪2-39-1

国立大学法人熊本大学

研究・国際部研究支援課 上野・有田

TEL. 096-342-3143 (直通) FAX. 096-342-3149

E-mail: gjk-senter@jimu.kumamoto-u.ac.jp

## 2. 3大学シンポジウムの開催

佐賀大学、長崎大学、熊本大学の研究者(各大学3名を予定)が、干潟浅海域に関する研究成果を、一般市民を対象として講演します。さらに、ポスターによる発表も同時に行います。

日時:11月22(土)10時～17時

場所:熊本大学工学部2号館223教室

熊本市黒髪2-39-1(熊本大学南地区)

参加費:無料

講演内容:10月下旬決定

問い合わせ先:

〒860-8555 熊本市黒髪2-39-1

国立大学法人熊本大学

沿岸域環境科学教育研究センター

秋元和實

E-mail: akimoto@sci.kumamoto-u.ac.jp

## 3. 沿岸域センターの移転

沿岸域センターは、「むつごろう通信12号」でお知らせしたとおり、平成19年8月1日に黒髪共用棟1(旧工学部研究棟II-I)に管理運営スペースを設置し、8ヶ月間運営を続けてきました。しかし、学内における新機構の設置や事務部の再編・移転などで、平成20年4月17日に黒髪共用棟3(旧工学部3号館)の6階に移転しました。センター長室(22㎡)・教員研究室(19㎡)・多目的研究室(152㎡)の3部屋がありますが、多目的研究室は広いために、会議室・測定室・資料整理保管室に仕切っています。今年度の前半はこの建物の内部改装、後半は耐震補強工事のためにまだ十分な利活用が出来ませんが、センターの運営上おおいに助かっています。工事完了後は、沿岸域センターの発展におおいに寄与することが期待されます。



黒髪共用棟3(旧工学部3号館6階)  
沿岸域環境科学教育研究センター

連絡先:〒860-8555 熊本市黒髪2丁目39番1号

熊本大学沿岸域環境科学教育研究センター

事務連絡先:熊本大学研究・国際部研究支援課

TEL:096(342)3143 FAX:096(342)3149

HP: <http://engan.kumamoto-u.ac.jp/index.html>